
マー君のおかげ

瓢六玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マー君のおかげ

【Nコード】

N3137J

【作者名】

瓢六玉

【あらすじ】

現代にも座敷ワラシはいるのだから…。引越してきたマンションに、たびたび起こる怪奇な現象は…。

結婚以来、ずっとアパート暮らしだったが五年目にして、ようやく郊外に中古マンションを購入することができた。

やや交通の便はよくないものの、築二十年のその物件は南向き角部屋・五階の4LDKでかなりの破格値だった。

ただ、今になって思えば登記の時に、過去の所有者が転々としていて、みな短期に手放していることにちよつとは不信感を持てばよかったのかもしれない。

マンションは五階建てで南棟と北棟がコの字につながっていて、百数十世帯が住んでいた。

管理人さんは初老のご夫婦でとても感じがよかった。

隣家の岡山さんちも奥さんが愛想よく、引っ越し初日から気軽に話のできる雰囲気だった。

二人とも教員の私たち夫婦は引っ越しの荷物が多くてようやく全部片付いたのは夏休みになってからだだった。

越してから、ひと月ふた月は何事もなかったが、三月四月とたつうちに家の中で、ちよいちよい物が紛失することがあった。

最初は引っ越しのとき誤ってゴミと一緒に処分したのかと思って、諦めもしたが、どうもそれだけじゃ有り得ないおかしいことも続いた。

例えば、冷蔵庫のプリンが三つ買ったはずなのに、誰も食べていないのに二つになっていたり…。

お風呂のお湯が夜の間に栓が抜けていたり…、お砂糖とお塩の容器が左右逆に入れ替わっていたり…。

とにかく、アラッ？ という不可思議なことが時折、起きていた

のだった。

気にさえしなければいい、と思えば、どってことない些事ばかりなのだが、なんだかまるで遠野物語に出てくる「座敷わらし」でもいて私たち夫婦をからかっているみたいないな感じでもあった。

アパート時代に生まれたマサハルは、一才半になりどこにでもヒヨコヒヨコ歩きをしても目が離せなかった。

ある日なぞ姿が見えなくなりダンナと慌てて探し回ったが見つからず青くなっていたら、ベランダの据え付け物置の中からケラケラと笑い声が聞こえてきて、なんだか一人オママゴトをやっていた。それにしてもよくも自分で内側から締め切って、真っ暗な中でやっていったものだと思っただ。

物置には、段ボール荷物を収納していたが、ちょうど幼児一人分が入れるくらいの隙間があったのだ。

いつの間にか、そこはマー坊のお気に入りの場所になってしまいそこで眠り込んでしまったことさえある。

そんなことがあっても私たち夫婦は、危険でさえなければかまわないと高をくくっていた。

そして、忙しさにかまけてマー坊の体調の変化には気づかず이었다。

ある日、保育園のお迎えにいくと、若いマドカ先生が心配そうに言った。

「おかあさん。

最近、マー君、おうちでゴハン残さないできちんと食べてますかあ？」

「えっ？ ああ…、そういえば、ここのところオカズを残すことが多かったですね…」

「やっぱり、そうですか…。」

近頃、園でも、そうなんですよ。

なんだか、食が細くなつたような感じがして、気になってたんです…。

それに、顔色もちょっとさえないかなって…」

まだ若くて未婚のマドカ先生だったが、さすがにプロの保育士だな、と私は感心した。

「もし、気になるようでしたら、いちど小児科のお医者さんに診てもらってもいいかもしれませんね。」

園では、特に感染性の疾患は今、なにも流行ってませんけど…」

私はマドカ先生の親切なアドバイスを礼を言つてマー坊と帰宅した。

玄関を開けるや否や、私は敷居の手前でふいに何かにつまずいて、上りのところに手をついて激しく転倒した。

あまりの痛さにしばらく声も出なかったがマー坊は何でもなかったの、とりあえず安心したのだが…。

つまずくはずのない所で転倒したのはこれで二度目だったので私は怪訝な気分になった。

ダンナも越してきてから二度ほど玄関でつまずいている。

たしかに、その晩もマー坊は、好物のハンバーグもポテトサラダも半分ほど残した。

明らかに、彼の食行動に異変が起きているようだった。

ダンナと相談して、翌日、かかりつけの診療所で診てもらった。

「これと言って、悪いところは見当りませんけど
少しだけ貧血と低血糖気味ですので二、三日、点滴をやって様
子を見ましよう…」

ということだった。

それから三日ほど園の帰りにマー坊を点滴に通わせた。

まだ、小さい腕に小一時間も注射の針を刺しつきりにするのは可
哀想でもあったが、致し方なかった。

日曜の午後。

ダンナの親友の山下さん一家が遊びにきた。

ここの長男はマサヒロ君で、やっぱりマー君だった。

彼は、ウチのマー坊よりも一つ上だった。

この家族とはたびたびキャンプや食事会でいつもいっしょに遊ん
でいる。

奥さんの圭子さんとも私は仲がよかった。

マー坊とマー君は幼馴染みなので、すっかり意気投合して遊び興
じていた。

ダンナどつしは夕飯前なのにすっかりワインとウイスキーで完熟
トマトみたいに赤くなつて盛り上がっていた。

夕飯には、鉄板焼でふた家族6人でワイワイ楽しくやった。

一段落して、さてデザートでも食べようとしていた時だった。

マー君がベランダの方を見ると圭子さんに

「ママ。あの子どこの子？」

と訊いた。

「えっ？」

「んっ？」

と圭子さんも私も誰もいないベランダを見た。

「マー君、いったい何処に、誰がいるの？」
と私が尋ねた。

マー君は部屋の中から

「あそこ…」

と物置を指さした。

圭子さんが立ち上がってベランダのサッシを開けて確認してみても、もとより誰もいようはずがなかった。

「なーに？ マー君。だーれも、いないわよ」

と圭子ママが言うと、今開けたばかりのサッシの隙間を通してマー君は物置めがけて猛然とダッシュした。

そして、突然…

「ガン！ ガン！ ガーンッ！」

と思い切り、近所に響くほどに物置のアルミ戸を蹴ると大声で怒鳴った。

「お化け！ あっち、いけッ！」

そして、しばらくするとスゴスゴ戻ってきて

「いっちゃったよ」

と何事もなかったように平然と言った。

圭子さんは呆気にとられ目を点にしていたが、ご亭主に

「なんなの？ この子？」

とふると

「何かいたんじゃねーの…」。

子どもはそういうの見える、つつうから…」

と赤い顔をしながらご主人は応えた。

この年齢では、大人をかついだり冗談で受けをねらったりするものではない。

私は半信半疑でマー君に尋ねてみた。

「マー君。どんな子がいたの？」

「ちっちゃい子。」

マー坊とあそびたいから、つれていきたかったんだって…」

マー君は、サラッと応えた。

私は、これまで一連のことを思い返して、とたんにザワッと鳥肌がたった。

（じゃ、越してきてからずっと、その子がいたの？

ここに…。

なんで？ …）

マー坊は、この日以来、もりもりと食欲が回復してきて、顔色もみるみる血色がよくなってきた。

そして、家のなかでの不思議な現象や玄関でつまずくことがなくなった。

してみると、これはやはり、あの時マー君が「座敷わらし」か「子どもの霊」を追いだしてくれたからだろうか…。

8年ほど住んだ後に私たち一家はダンナの実家で親と二世帯暮らしをすることになった。

そして、引越しの当日、隣家の岡山さんからこんな話を聞いた。

「実はね、今だから、言うんだけど…。

この部屋でね、マンションが出来たばかりの頃、2歳半くらいの女の子がベランダから転落して亡くなったのよ。

最初に言っと、気味悪がると思って内緒にしていたの。

ごめんなさいね…。

ここを買った人たちが、いつもすぐに出て行ってしまってもんでもなんだか、少し気味悪かったんだけど…。

金田さんが、長く住んで下さったんで私もなんだかホッとしたわ

…」

それを聞いた私は、

（ああ。やっぱり、マー君のおかげだ…）

と思いながら住みなれたマンションを後にした。

（後書き）

これはウチの長男が保育園児のころ、じっさいにあったエピソードをもとにして創作したものである。

ある晩、無人の薄暗い玄関を指さして

「この人、だーれ？」

とやったものだから、私もカミさんもぶったまげた。そして、突然ダッシュして

「おばけ、あっちいけーッ」

ってドアをキックした。

その日、Kさんという近所のお爺ちゃんが亡くなったことを翌日知って、夫婦して青くなった。

その息子もいまや大学生になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3137j/>

マー君のおかげ

2010年11月3日01時24分発行